石川看護研究会　Journal of Ishikawa Society of Nursing Research, Vol.18, No.1, pp. 8～14, 2006.

総　　説

ナイチンゲールの発想にみる クリティカルシンキング

泉　キヨ子

金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻

An idea of Florence Nightingale and critical thinking

Kiyoko Izumi

Division of Health Sciences Graduate School
of Medical Sclence Kanazawa University

はじめに

「どのような訓練を受けたとしても，もし(1)感じとることと，(2)自分でものを考えること，この二つが会得できなければ，その訓練も無用のものとなってしまうのです」[1]

これはナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820-1910）が創設した看護師訓練学校の見習生（今日の看護学生）への書簡（1873）[1]で述べている一節である。ナイチンゲールは，看護師には専門的な訓練（training）が必要であるとして，1860年にロンドンに看護師訓練学校を設立した。ナイチンゲール方式で訓練を受けた卒業生は世界中から要請され，派遣されて，近代看護を確立した。

看護学の発展過程を，看護理論，地域看護，看護管理，看護研究，感染看護さらには災害看護にいたるまでそのルーツは必ずナイチンゲールに辿り着く。すなわち，ナイチンゲールの看護は，看護学発達史上の原点であると位置づけられ，その考えは今日の看護のあらゆる分野につながっている。

ところで，クリティカルシンキング（critical thinking）とは，①理にかなって熟慮することであり，確信すべきことや行動すべきことに焦点をあてる[2]，②意図的な目的思考型の考え方であり，技術を基本とした「思考能力」とクリティカルな思考を押し進める「態度」から構成されており，一般的には，現象を抽象化したり，情報から推論したり，証拠となるデータを集めながら，論理的に判断していく能力[3]，などさまざまに定義されている。看護におけるクリティカルシンキングについては，全米看護連盟（National League for Nursing：NLN）が1989年から導入しはじめ，米国の看護大学では独自の定義を設けてカリキュラムに取り入れられており，筆者も1994年にワシントン大学のカリキュラムセミナーで初めてこの言葉を知った。そのときは，科学やテクノロジーの急速な発展に伴い，すべての知識を学生に教えることが不可能になり，学生がさまざまな情報をいかに，統合して，思考力や問題解決能力を駆使して，看護を実践していくかのものの考え方[4]だと理解した。

今回，ナイチンゲールが19世紀の英国の衛生問題（健康問題）や看護の改革に取り組む姿勢をクリティカルシンキングの視点をあててみると，ナイチンゲールこそ優れたクリティカルシンキングシンカー（Critical thinker）ではないかと考えたので，それについて述べてみたい。

Ⅰ．ナイチンゲールはどんな人か[5)6)7)8)]。

ナイチンゲールは1820年に5月12日，両親が旅行中のイタリアのフレンツェで2人姉妹の次女として生れ，90歳でその生涯を閉じた。ナイチンゲール家は英国ヴィクトリア朝の名門であった。ナ

イチンゲールの教育については，初めは女性の家庭教師に任されていたが，ナイチンゲールが12歳になったとき，父親が変わって姉妹を教えることになった。父のウイリアム・エドワードはケンブリッジのトリニティ・カレッジを出ており，女性の教育について時代の平均的意見より進んだ考え方を持っていた。ナイチンゲールに数学，語学（イタリア語，ドイツ語，フランス語，ラテン語，ギリシア語），憲政史，ローマ史，ドイツ史，イタリア史，トルコ史，小論文作成などを教えた。とくに数学に興味を持っていた。その教育はきちんと予習をさせ，ナイチンゲールは真面目に取り組み，時には午前4時に起きて勉強に精を出していた[5]。その一般教育は今日の大学教育の標準以上であったとさえいわれている[6]。彼女は当時の社交的な生活よりも看護を天職と考えていたが，両親の反対や機会に恵まれなかった。しかし，1850年に2週間と1851年に4ケ月ドイツのカイザスウェルトにあるプロテスタントのカイザスウェルト学園に行き，看護の訓練をうけた。その後，ロンドンの淑女病院（病気中の淑女のための病院）の監督として1年間従事した。翌年起こったクリミア戦争（1854～1856）における傷病兵の悲惨な状況をタイムズ紙の報道で知り，病める者，傷ついた者に仕えたいと機会を待っていたナイチンゲールは志願し，同時に政府からの要請も受けて，38人の看護団を組織してトルコのスクタリに渡った。その看護団には訓練を受けた看護師は一人もいなかった。ナイチンゲールはスクタリにある病院の衛生面の改善に全力を投入し，夜は傷病兵のベッドを見回った。ここでの精力的な働きかけにより，6ケ月で傷病兵の死亡率は42%から2.2%に激減した。その後，彼女は前線であるクリミア半島の病院視察に行き，そこでの働きで体力が尽き，ひどいクリミア熱に悩まされた。戦後（1856）英国に戻り，病気のためベッド中心の生活を送りながらも，陸軍の衛生問題の改善や「病院覚え書」「看護覚え書」を出版した。「看護覚え書」はベストセラーになった。またクリミア戦争中，陸軍病院の統計数学に表れている表は死者の数さえはっきり記載されていないことや帰国後にはロンドンの病院の統計も科学的な整合性がないことを知り，統計上の欠陥の改良に着手した。1857年にはイギリス統計学会員に選ばれた。1860年には，念願であった「看護という仕事を訓練を要する専門的職業とする」ための教育施設（ナイチンゲール看護師訓練学校）をセント・トマス病院に創立した。この財源はクリミア戦争の功績であるナイチンゲール基金によりなった。ここで訓練を受けた卒業生（ナイチンゲール看護師）は世界中から要請された。ナイチンゲールは，近代看護の創始者として，その名声は不動となった。彼女は病気がちであったので，その大半は自宅で過ごし，学校創立12年後からは学生に年一回書簡を送り，1900年までに14通の書簡を送った。一方ではその間，陸軍の衛生問題の改善や陸軍病院およびインドや英国の貧民階級の衛生問題に全力を注いだ。精力的な執筆活動は80歳代まで続き，200編余りの出版物と15,000～20,000通の手紙を書いた。

2．ナイチンゲールの発想にみるクリティカルシンキング

1）クリティカルシンキングの気質にあふれた人

1990年米国哲学協会がデルファイ法を用いてクリティカルシンキングの気質をあきらかにした。クリティカルシンキングの気質とは，①真理の探究（truth-seeking），②偏見のない開かれた心（open-mindedness），③分析性（analyticity），④系統性（systematicity），⑤クリティカルシンキング自己自信（critical thinking self-confidence），⑥探究心（inquisitiveness），⑦成熟性（maturity）の7つを指す。真理の探究とは，与えられた状況で最善の知識を探求する熱心さであり，偏見のない開かれた心とは，自分の偏見を知り，多様な考え方に対して心を開き寛大であることである。分析性とは，推論や証拠に基づいて問題を分析し，問題解決のプロセスを評価する力である。系統性は組織的で，順序性のある，焦点を絞った，勤勉な探索ができる気質である。クリティカルシンキング自己自信とは，推論の過程で自分の推論に自信を持つことであり，自分の堅実な判断を信用し，他者を導く気質である。探究心は学習への意欲と知的好奇心であり，成熟性とは，自分の意思決定に思慮深いことである[9]。

ナイチンゲールはその生涯を通してこのクリティカルシンキングの気質にあふれていたと思えるので，彼女の活動を通して迫りたい。

(1) 看護師への道

ナイチンゲールはごく小さい頃から二つの特徴をあらわしていた。その第一は鋭い正確な観察力であり，他は病人に対する関心と，それを助けたいという熱望であった[7]。母親と一緒にリー・ハ

ースト（ナイチンゲール家の夏の家）やエムビリー荘（冬の家）の村人のうちで病気の人や，助けを求めている人たちを訪問して歩いた。また人生にはこの自分が果たすべき使命があるという意識で『1837年2月7日，私はエンブリー荘で，神に召されているという実感を持った。』[5]という霊的な体験をした。幼いころより看護師になりたいという強い希望を持ち，看護師になるには訓練を受けたいと願っていた。「もしなにかを正しく行いたいのであれば，どのようにしてそれを行うべきかを学ばなければならない」という信念のもとに，25歳のときに決意を新たにして，看護師の訓練を受けるためにソールスベリイの救貧院病院に行こうとしたが，両親の反対にあって断念した。翌年ドイツのカイザスウェルト学園の報告書を読み，そこで看護の訓練をうけることを希望し，密かに機会を待っていた。30歳になったときにエジプト旅行の帰りにドイツのカイザスウェルトに2週間滞在し，感銘をうけた。翌年は3ヶ月のデアコニッセのコースを修了した。そこでの厳しい教育は彼女にとって喜びであり，積極的に看護の訓練をうけた。

このように与えられた状況のなかで，使命感に導かれたように看護への道を探求した人であった。看護に対する意欲と知的好奇心を絶えず持ちつづけていた。

(2) クリミア戦争における働き

スクタリに着いた翌日に，数日中に500人以上の傷病兵が既に満員のこの病院に来るという通知を受け，ナイチンゲールは闘志を燃やした。何を第一になすかということで，各病院での不足な品物を補い，300個の床用ブラシを請求して環境を整えた。クリミア戦争における当時の陸軍の病室は吹きさらしで，兵士はしらみと病気で悩まされ，便所はほとんどなく，汚水だめはあふれ，水も汚染していた。自力で食事を摂れない患者は餓死した。このような状況のなかで，ナイチンゲールは時には私産を投じて，洗濯場を再組織し，栄養のある食事を定時に出し，ボイラーを設置するという具合に働きかけた。その一方では，日夜ベッドからベッドへの病人を見回り，病人に希望を与え，〝ランプを持った天使〟と崇拝された。それについてストレッチーは〝それは上品なやさしさや女らしい自己放棄によってではなかった。それは，厳密な方法を用い，きびしい規律を守り，ぬかりなく細部に注意を払い，休みなく働くことによって，不屈の意志のゆるがぬ決意によって実現したのであった〟[10]と記している。常に傷病兵の回復を第一に考え，綿密に実行可能な計画を立て，安楽でいられる方法を積極的に実施した。そのためには，床掃除やボイラー設置など，いわゆる衛生的な環境を整えることを細部に渡って行った。彼女の仕事は，たとえ看護の仕事ではなくても，傷病兵にとってよいことは積極的に実行したので，最終的には誰も納得せざるをえなかった。ナイチンゲールは彼女を派遣したシドニー・ハーバート（戦時大臣）には，手厳しくあたり，連日手紙を送った。その後，兵士の治療や看護が落ち着いたときに，もっと人間として向上してほしいという観点から，回復期の患者が酒場で金を使うのを見て，他にすることがないからだと気づき，図書を開き，銀行を開業した。酒を控え，家族に送金を促したことで，兵士は人間らしい余暇を過ごすようになった。ここには彼女の「健康とは持てる力を十分活用できている状態」[11]という健康感が生れたのであろうか。

(3) 英国陸軍の衛生問題の改革

あらゆる公式の歓迎を断ってクリミアから帰国したナイチンゲールは「私は殺された兵士たちの祭壇の前にたっている。私は生きている限り，あの人たちの命を奪った死因に対して戦う」[12]と多くの兵士の無惨な死を思い，イギリス陸軍全体の衛生状態を改善しないかぎり，この悲劇は続くと確信した。これは軍隊の問題であり，当時の女性では関知できない分野でもあったので，ナイチンゲールは勅選委員会をつくることを考えた。ヴィクトリア女王に考えを説明し，陸軍大臣にも協力を得て「陸軍の衛生状態に関する勅選委員会」を設立した。この委員会は委員になれないナイチンゲールが水面下で委員を選定し，活動を指揮していた。また，ナイチンゲールは統計学に優れており，統計学を駆使してデータを分析し，陸軍の医療統計の徹底的な研究をして，膨大な報告書を作成した。兵舎の衛生や統計局を設置する問題について，彼女は実証的に証明するために，分析したデータを独自な方法で四角形，円およびくさび形のグラフを使い，カラーをつけ数字から色分けしてみせた[13]。陸軍の医療統計をやり直しした。その結果，1860年代には，すべての兵舎と軍病院の換気や暖房，給水や排水，洗濯場や料理場が改善された。レクリエーションの設備も認められ，読書室などがつくられた。このようにクリミア戦争

を終えての活動はまさしく，陸軍の衛生問題の解決のために，すなわち，兵士の健康をどのようにしたら保つことができるかという目的のために，最善の方法を綿密にたて，データを入れた実証的方法ですすめたことは優れたクリティカルシンキングではないだろうか。

また，1858年『病院覚え書』を発表した。これは「病院がそなえているべき第一の必要条件は，病院は病人に害を与えないことである」[14]という一節から始まる。この本は，新鮮な空気の必要性と日光の必要性にとどまらず，直射日光の重要性（眼疾，その他例外的な場合を除き）を一貫して強調した点で時代に先んじていた。この主張は科学的な原則にもとづいていた。彼女はクリミア戦争の間の，また外国の病院における経験と観察からそれを主張したのであった[15]。

(4) 一度も訪れたこともないインドの衛生問題や看護への取り組み

彼女はイギリスばかりでなく，驚くべきことには一度も訪れたことのないインドの陸軍の健康問題やインドにおける看護の組織作りにも着手した。インド各地の環境条件，兵舎の状態，兵士の生活，さらにインド人の生活について詳細なデータをとりよせ，得意の統計を使って分析した。そして「どうすればインドで，人は死なないで生きていけるか」「インドの病院における看護」「インドにおける生と死」「インドの人々」などの著作を書いた。その結果「インド総督の監督女史」というあだ名がついた[6]。「インドの病院における看護」は，インドに看護の組織化をはかるナイチンゲールの提言の小論文である。そこには，新たに看護の組織化を計画的に始めるには，その指導と訓練のための学校をインドにも建設しなければならないという基盤作りの重要性を指摘している。これは看護の組織をつくるとき《何のために》という確固とした理念（目的）を持っていなければ，組織の弱体化や崩壊につながることを示唆している。またそれを実際に動かすには，最優先に有能な指導者が必要であり，看護師としての訓練だけではなく，看護の指導者としての訓練の必要性を指摘している。さらに有効な展開方法は吟味されたひとつの病院からはじめ，ルールづくりをシステムとして機能させることを提言している。これは今日もあらゆる組織作りの根本である[16]。

(5) ナイチンゲール看護師訓練学校の創設

1855年11月にクリミア戦争におけるナイチンゲールの働きに対して，ナイチンゲール基金が創設された。ナイチンゲールはこの基金を看護師学校の設立に当てようと決意していたが，健康が優れないことと前述した陸軍の衛生問題の仕事で踏み切れないでいた。しかし，1860年（40歳）にセント・トマス病院にナイチンゲール看護師学校を開校した。この病院にした最大の理由は信頼できる看護監督（マトロン）であるワードローパー夫人がいたことである。彼女はナイチンゲールとともにクリミア戦争へいった看護団の38人のうち，最も優れた看護師であった。つまり，優れた実践家の下でこそ看護師のトレーニングができると考えた。この訓練学校はもちろん宗教から切り離した看護師学校であり，訓練期間は1年間である。入学年齢は成熟度のある25歳から35歳までの女性とし，ナイチンゲール基金から生活費と年10ポンドが支給された。学校は看護の教育上病院に付設されていたが，財政的には独立していた。見習生はふさわしい環境で訓練を受けなければならないとし，道徳上の教育も重視し，病院内で設けた『ホーム』で生活させた。ホームはそれぞれ個室と共同の居間が整えられ，ホーム・シスターの指導の下に規律正しく，高尚な道徳ある生活を送ることが求められた。ナイチンゲールは病弱のため，教壇には立てなかったが，細かな評価表を作って把握した。卒業生は各地から歓迎されたが，必ずグループで送り，決して一人で行かせなかった。それは一人では看護を改革しようとしても，つぶされてしまうからであった[17]。

以上のようにナイチンゲールの活動を書いていくと，枚挙に暇がない。看護師になりたいという取り組み，クリミア戦争での働き，英国陸軍の健康問題の改革，一度も訪れることがなく仕上げたインドの健康問題の改革，世界で最初の専門職としての看護師訓練学校の開校など，すべて未知の世界に足を踏み入れるナイチンゲールの活動を概観すると，真理を求めて，グローバルな視点で健康問題や看護を総括的に捉え，大きな要素あげ，極めて詳細に分析し，時には統計的な方法や人脈を駆使し，統合して対処し，多くの問題や著書を仕上げていく姿が浮かぶ。これこそ偉大なクリティカルシンキンカーといえよう。

3）「看護覚え書」から探るクリティカルシンキング

ナイチンゲールの著作やことばからはどれをと

ってもクリティカルシンキングシンカー（critical thinker）とうけとれるが，ここでは序章と「病人の観察」から考えたい。

(1) 病気とは回復過程である。

「*すべての病気はその経過のどの時期をとっても，程度の差こそあれ，その性質は回復過程（a reparative process）であって，必ずしも苦痛を伴うものではないのである。つまり，病気とは毒された（poisoning），衰えたり（decay）する過程を癒そうとする自然のはたらきであり，それは何週間も何か月もときには何年も前から気づかれずにはじまっていて，このようにすすんできた以前からの過程の，そのときどきの結果として現われたのが病気という現象なのである。－これを病気についての一般論としよう。*」[18]

これは，「看護覚え書」の序章の最初にでてくる文章である。この病気とは回復過程であるという一般論はナイチンゲールの発想を特徴づける一節である。reparative は辞書を引くと，「修復する」とあるが，この意味の方がより理解しやすい気がする。すなわち，病気は生体の反応と自然の治癒力との闘いの結果の産物であるが，そのときも修復のプロセスのなかを生きているということである。病気になった直後から，自然の治癒力は働いているというとらえ方である。この回復過程については，がんの場合においても，正常細胞が癌化しようとしても，生体にはもとの状態に戻そうとする修復力が働き，癌化してしまった細胞に対しても，それを排除しようとして免疫力が働いて増殖を止めたり治癒の方向へ進めたりしており，このような治癒力がうまく働かなかった時に生体の生存を脅かす存在にまで成長するというのである。そして，通常の検査で発見できる大きさの臨床癌まで成長するのに，約9年かかっており，その生活の仕方や生きる姿勢がその進み方に大きく関与している[19]。

また，この病気は「知識の不足か注意が足りないために起こる」としており，病気になるような状況は人間が自分で作り，あるいは不注意で放置した結果おこるとしている。このように病気は自然の法則が働いて修復していくプロセスと捉えると，病気になったらその修復のプロセスに逆らわないで，自然が働きかけやすいように人間が意識して，周りの生活を整えようしようという発想になる。すなわち，病気とは回復過程であるという考えは，病気になったら自然に逆らわないで放置するというのではなく，人間の知識や注意によって自然の法則をコントロールするという発想である。

(2) 高い死亡率から引き出される奇妙な推論

「*ロンドンにおいては，10歳以下の子供たちが毎年25,000人以上も死んでいる。したがって子供病院が必要である*」略「*女性たちの健康上の知識が非常に不足している。したがって婦人病院が必要である*」*ところで，この両者が指摘している事実のほうはまさしくそのとおりである。しかし，そこから引き出してきた推論のほうは，いったいこれは何あろう？子供たちの死亡率が途方もなく高いことの原因は，誰もがよくよく知っているのである。すなわち，その原因は主として，清潔への取り組みが不十分なこと，換気の不足，食事や衣服についての不注意，あるいは家の壁塗りの不備などであって，ひとことでいえば《家庭》衛生の欠陥なのである。さらにその救済策も同じくよく知られているのであるが，その救済策のひとつに子供病院の設置などが入っていないことは確かである。子供病院は不足しているのであろうが，それは大人の病室が不足しているのと全く同じことなのである（以下略）。*」[20]

子供の死亡率が高いから子供病院，女性の健康の上の知識が不足しているから婦人病院をつくるという新聞記事が当時賑わしていたのを，ナイチンゲールが批判したものである。これらは〝こういう状況ではどうしたらよいか〟という頭は使うが意識的な思考を必要としない，いつもの慣れた思考過程をよりどころにしているとらえ方に対して，後者のナイチンゲールは〝なぜそのようになるのか，そのような病気にならなくするにはどうしたらよいか〟という目的をもって解答を探して意義に達する目的指向的思考であり，クリティカルシンキングの思考のであることがわかる。また，〝そのような病気にならなくするにはどうしたらよいか〟というナイチンゲールの発想は，そのデータの中味を分析して，その問題を現実の問題として改善できる方法を常に意図した視点である。これはナイチンゲールが多くの統計的なデータを分析しながら，常に一貫して用いている態度である。

(3) 観察の重要性

・*看護師に課す授業のなかで，最も重要でまた実際の役に立つものは，観察とは何か，どのように観察するか，どのような症状が病状の改善を示し，*

どのような症状が悪化を示すか，どれが重要でどれが重要でないのか，どれが看護上の不注意の証拠であるか，それはどんな種類の不注意による症状であるか，を教えることである。

・《正しい》観察がきわめて重要であることを強調するにあたっては，何のために観察をするのかという視点を見失うようなことは絶対にあってはならない。（中略）生命を守り健康と安楽とを増進させるためにこそ，観察するのである。

・観察力は訓練によって常に進歩していく－訓練を欠いては観察力はほとんど働かないのは本当である。というのは訓練された観察力なしでは，看護師は何を探し見つけてよいかわからないからである。病人をただ見つめるだけでは観察とはいえない。眼で見ること（to look）は必ずしも見てとる（to see）ことではない。よい看護というものは，あらゆる病気に共通するこまごましたこと，およびひとりひとりの病人に固有のこまごましたことを観察すること，ただこの二つだけで成り立っているのである。[21]

ナイチンゲールは『看護覚え書』の多くの頁を「病人の観察」について述べており，看護教育における正確な観察の重要性を指摘している。観察は，何のために，どのように観察すべきかと，という目的指向的な点をあげ，よい観察は共通性と個別性の両方から捉えることであるとしている。また，正確な観察をするには，訓練が必要であることを強調しており，「５つ６つのポイントを押さえた質問をしてその患者の全体像を引き出し，彼の問題点が《どこにあるか》を正確に把握して報告できるような人（以下略）」[21]ともいっている。このような人こそクリティカルシンキングのできる人であろう。経験を通してみえた具体的な現象を抽象化したり，つかんだ根拠ある情報から推論を押し進め，証拠となる事柄を集めながら，論理的にものごとを判断していくことである。

おわりに

ナイチンゲールはその生涯を通して，どのような苦難があろうとも，いや苦難のときこそ燃え，問題に対して冷静に観察し，熟慮する態度や論理的な探求法や推論，それを適用する技術を駆使していた。

すなわち，意図的な目的指向型の思考を持ちつづけ，証拠に基づいた判断を下して，さまざまな問題を改革していった。その視点は，常に実現可能な現実の問題として改善できる方法に定めていた。このような思考は幼少時に受けた高い一般教養が影響しているのであろうか。使命感なのだろうか。

次のように，クリティカルシンキングを通してみつめたことで，かえってその偉大さを実感した。

文　献

1）湯槇ます監修：ナイチンゲール著作集第３巻，看護婦と見習生への書簡二，285，現代社，1988

2）アルファロ著，江本愛子監訳：看護場面のクリティカルシンキング，９－10，医学書院，1996

3）野地有子・牧本清子：楽しく学ぶクリティカルシンキング，２，廣川書店，2001

4）泉キヨ子：米国における看護教育カリキュラム開発セミナー及びリハビリテーション病棟，老人ホーム施設見学研修，石川看護研究会誌，8(2)，1995

5）エドワード・クック著，中村妙子訳：ナイティンゲール「その生涯と思想」Ⅰ，1993

6）小玉香津子訳：看護の歴史，117－150，医学書院，1978

7）ルーシー・セーマー著，湯槇ます訳：フロレンス・ナイティンゲール，メヂカルフレンド社，1975

8）小玉香津子：世界伝記文庫24　ナイチンゲール，国土社，1980

9）野地有子・牧本清子：楽しく学ぶクリティカルシンキング，６－７，廣川書店，2001

10）リットン・ストレイチー著，橋口稔訳：ナイティンゲール伝，岩波文庫，1993

11）湯槇ます監修：ナイチンゲール著作集第２巻，病人の看護と健康を守る看護，128，現代社，1988

12）ルーシー・セーマー著，湯槇ます訳：前掲書，139

13）多尾清子：統計学者としてのナイチンゲール，医学書院　1991

14）湯槇ます監修：ナイチンゲール著作集第２巻，185，現代社，1988

15）エドワード・クック著，中村妙子訳：ナイティンゲール「その生涯と思想」Ⅱ，1993

16）天津栄子，泉キヨ子，木下幸子：新しい地に看護の組織づくりをするときのナイチンゲールの示唆，ナイチンゲール研究，第５号，46－52，

1999
17) 泉キヨ子，天津栄子，木下幸子：『アグネス・ジョーンズをしのんで』にみるナイチンゲールの看護　監督者像について，ナイチンゲール研究　第3号，97－101，1995
18) 湯槇ます，薄井坦子他訳：看護覚え書，1，現代社，1983
19) 嘉手苅英子：「病気は回復過程である」について，ナイチンゲール研究，第1号，71－72，1990
20) 湯槇ます，薄井坦子他訳：看護覚え書，5－6，現代社，1983
21) 前掲書，169-202